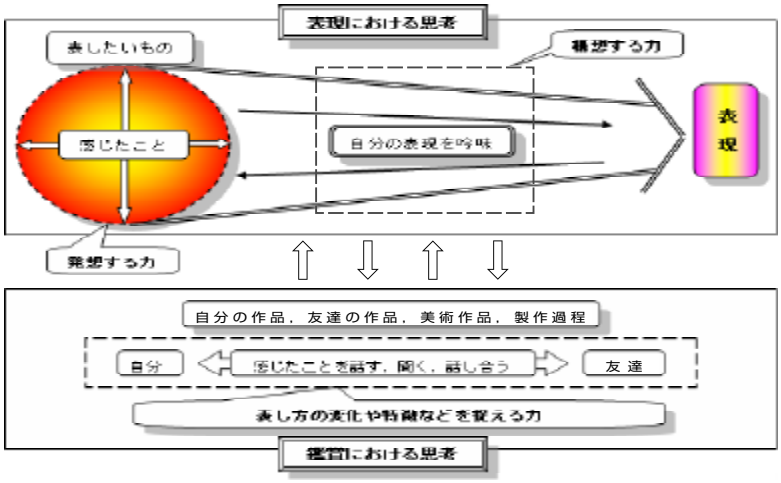
図 画 工 作 科

1　育成したい「思考力」

a　感じたことを基に，多様な観点でイメージを深めたりアイデアを広げたりし（発想する），表したいものを実現可能なものにするために，表現方法を吟味する（構想する）力
b　感じたことを話す，聞く，友達と話し合うなどして，表し方の変化や特徴などを捉える力

図画工作科では，「表現」においては，「何をつくろうか」「どんなアイデアがあるか」という発想する力と，「表したいものを実現するためにはどのような方法が適しているか」という構想する力が思考の中心となる。

一方「鑑賞」においては，友達と交流しながら，形や色などについて「違いは何か」「なぜそのように感じるのか」と，表し方の変化や特徴を捉える力が思考の中心となる。



（１）感じたことを基に多様な観点でイメージを深める・アイデアを広げる力（発想する力）

○　イメージを深める力

イメージを深める力とは，表したいイメージを具体的に思い描く力のことである。例えば，花の絵を描くとする。はじめは概念的で記号のような花（例：チューリップ→ ）を思い浮かべる場合が多い。しかし，その花がいつ，どんなところに咲く花なのかといった「時間的」「空間的」な観点をもつことで，花やその周りの様子がより具体的になる。そのことによって，誰もが思い描く一般的な花から，自分が表したい，感性豊かに思い描いた固有の花になるのである。

○　形や色にかかわるアイデアを広げる力

例えば，無造作に紙をちぎる。すると，その紙の形が動物に見えることがある。さらに，紙を斜めに置いたり裏返したりした時，全く別のものに見えてくる。このように「向きを変えたら」「裏返したら」等の方法をもってアイデアを広げていく力のことである。上記の花の例では，「花びらの色を変えてみたら」「大きくしてみたら」「向きを変えてみたら」等，感性を働かせながら，描く対象を色や形等にかかわる観点から見つめ直すことで，アイデアを広げていくことができるのである。

（２）表したいものを実現可能なものにするために，表現方法を吟味する力（構想する力）

広がり深まった発想から表現したいものを決め，表現方法を試しながら表したいものを表現可能なものにしていく力である。「○○の色より□□の色を使ったほうがぴったりするかもしれない」などと，表したいことと材料や場所等の特徴，構成の美しさや視覚的な効果などを照らし合わせながら表現方法を取捨選択していくことで，表したいものが実現可能なものとなる。

（３）感じたことを話す，聞く，友達と話し合うなどして，表し方の変化や特徴などを捉える力

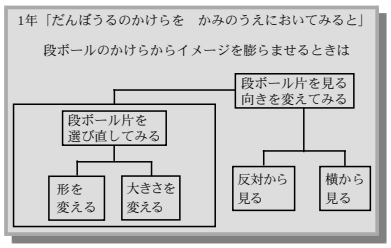
鑑賞において，子どもたちは，自分の作品を改めて見直したり，友達の作品や美術作品，製作過程を見て，さまざまに感じたりする。それについて話したり，友達の話を聞いたり，友達と話し合ったりする際，単に「こっちの方がいいです。」ではなく，形や色，材料，用具の使い方とつないで話し合わせることで，表し方の違いや変化，特徴を捉える力が育つと考える。そのためには，「○○な感じを表すために□□を使ったよ。」，「この部分に△△色を使っているから，…な感じがよく表れているね。」「ここを大きくかいたのは，きっと…を表したかったからだ。」など，造形的な言語を介しての話し合いが必要になる。

２　「思考力」を育成するための思考様式

発想する力

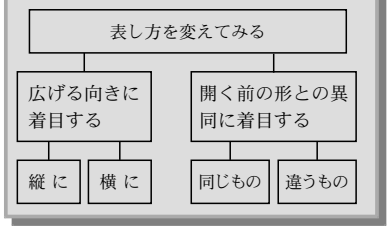
アイデアを広げる

形や色，用具，材料を試す



３年「つないでつないで
ストロージャングルジム」
つなぎ方の向きや位置を
変えてみる。

４年「ひらくとあれあれ？」
おりたたみ絵本」



4年「風に乗って旅しよう」
形や色，配置に着目して
アイデアを広げる。

５年
「季節のとびらを開けて」
色だけを取り出してアイ
デアを広げる。

イメージを深める

言 語 化

３年「夢の城へようこそ」
表したいものの形や色のイ
メージを，物語の内容とつ
ないで深める。

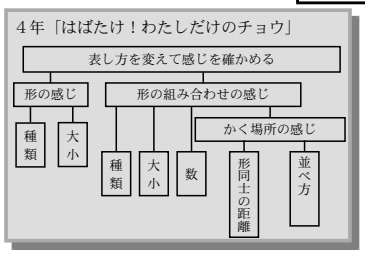
５年「どんなカンジ，
漢字アレンジ」
表したいものを，具体的な
言葉に置き換えてイメージ
を深める。

５年「つくれるよ
ふしぎな世界」
対照的な感じを表す言葉を
手がかりにして，形や色の
イメージを深める。

構想する力

表現にかかわる要素と効果に着目して

形 や 色



５年「つくれるよ，
ふしぎな世界」
様子の違いを表すのに効果的
な形や色を見つける。

５年「光とかげ」
色の組み合わせを変えて，見
え方の違いを比べる。

５年「季節のとびらを開けて」
イメージと表現のつながりを，
形，色から捉える。

６年「通りぬける光」
形や色の組み合わせや並べ方
の見え方の違いを比べる。

し く み

６年「厚紙をつないで動く絵」
つなぎ方による動きの違いを比
べる。

材 料 ・ 用 具

つくっていく過程で

部 分 か ら

３年「夢の城へようこそ」
基本になる形をつないだり付け
足したりして，イメージを表す。

全 体 像 か ら

３年「住んでみたいな夢の家」
大まかな形に置き換えて，イメ
ージを表す。

材 料 ・ 用 具

４年「風に乗って旅しよう」
イメージ合う表現を，用具
や材料の特徴から選び直す。

表し方の変化や特徴などを捉える力

作品を鑑賞して（つくる前）	つくっていく過程で	できあがった後で

※　鑑賞を中心とした実践は，これまで行われていないので，空欄になっています。

※　これらの思考様式は，実践の一部であり，全てを掲載しているものではありません。

３　図画工作科における言語活動

（１）個の「実感・納得」を促す体験の言語化

図画工作科における体験とは，材料や作品について自分の感覚などを基に，見たり触ったりして感じを確かめること，そのことについて語ったり友達と話し合ったりすること，材料や用具，形や色などを試してみることである。それに加えて，なぜその形や色などがよいか理由を考えたり，どの形や色を選ぶのかを判断したりすることが思考に有効に働く。

①　問題や状況を簡略化したり，問題点を焦点化した教材

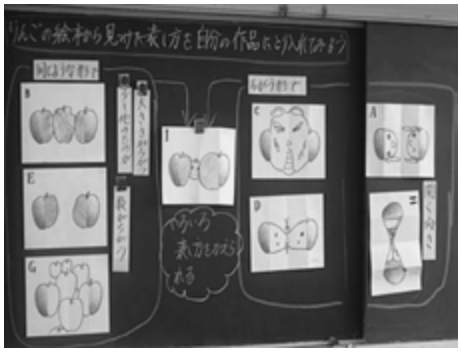
例えば，第５学年の「光とかげ」では，通常の光の下での見え方とブラックライトを当てたときの絵の見え方の違いのおもしろさを絵に表していく。しかし，どこに水彩絵の具や蛍光性の絵の具を用いればよいかが捉えにくい。そこで，まず，何回も色の感じを試す体験ができるように，水彩絵の具でかいた絵の上に透明シートをかぶせて，その上から蛍光性の絵の具で絵をかいた。それにより，見えてくる部分と消える部分に着目することができ，「色の組み合わせを変えて見え方の違いを比べる」思考様式を創出することができた。

②　思考のプロセスを自ずと振り返る教材

例えば，第５学年の「どんなカンジ？漢字アレンジ」の学習では，まず，「快」を共通課題と設定した。そして「快」の線の太さや形，色を工夫するために，各自でその漢字からイメージした言葉をカードに表す体験を行った。すると「すっきり」「気持ちいい」といった抽象的な言葉が多く出されたため，教師は子どもの経験を基に「快」のイメージを語らせていった。すると，子どもたちは「私は，朝起きたときの布団の中が気持ちいいです。」「ぼくの場合，暖かい部屋で本を読む時の感じです。」と，「いつ」「どこで」などの視点をもてばイメージを深めることができることが確かめられ，「具体的な言葉に置き換えてイメージを深める」思考様式のよさが「実感・納得」できた。

（２）集団での「承認・合意」を促す集団吟味

①　似た反応を板書上でまとめ，思考様式を位置付ける



第４学年「ひらくとあれあれ？おりたたみ絵本」では，絵本の内側に表す絵のアイデアが広がりにくいことがある。そこで，前時までの試しの作品を板書上で操作しながら仲間分けする場を取り入れた。それにより，絵の表し方の共通点が視覚的に捉えやすくなった。さらに，グループごとに「同じような形で」や「違う形で」，またそれぞれの中で，「大きさ」や「開く向き」など，ラベリングすることで，内側に表すもののアイデアを広げる際の思考過程が明確になり，「広げる向き・開く前との形の異同に目をつける」思考様式のよさを「承認・合意」することができた。

②　結論と思考様式とを板書上で結び付ける

第４学年「風に乗って旅しよう」で，例えば水彩絵の具を用いて「はげしい風の感じを出したい。」という子どもに「色を濃くして，勢いよく線を描くといいよ。」と，言葉のみで表現の工夫を伝えてもそのよさは捉えにくい。そこで，モデルとして引き出した２枚の絵について，「強い風」「弱い風」と感じた理由を，色の組み合わせや濃淡，線の形などの造形要素と結びつけて板書した。それにより，「濃い色を使ったり，勢いよく線をうねらせたりすると強い感じが出てきた。」「薄い色であまりうねらさずに描くと弱い感じになる」などの反応が生まれ，「絵の具や筆の使い方に目を付ける」思考様式のよさが「承認・合意」された。